
東の小さな魔女

雪城

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東の小さな魔女

【Nコード】

N 3 6 1 7 M

【作者名】

雪城

【あらすじ】

「えっ…！？ちよ、何こ——」

言葉を発する暇もなくいきなり足元に現れた不思議な陣に導かれて、異世界にタイムスリップ！？

東の魔女って誰！？その魔女の孫があたし！？

異世界に（強制）召喚された少女が東を目指して旅をする奮闘物語。

ブローグゝ小さな始まりゝ

おばあちゃんが死んだ。

それはほんの数日の前の出来事。おばあちゃんっ子だったあたしは、その事実が信じられなくてただ過ぎていく時間に身を任せていた。

そして、今、お葬式などすべてのことが終わってやっとあたしは理解する。

ああ…、本当に死んじゃったんだ……。

ポロポロと涙がどんどん溢れてくる。

「うつう、ひつくひつく……。」

嗚咽交じりにたくさん泣いた。今年で16歳になるというのにみづともなく大声を上げて泣いた。あんなに元気だったおばあちゃんが死ぬなんて信じられなかった。

“またいつでも来なさいな”

それがおばあちゃんと最後に交わした言葉だった。

あの包み込むような優しい声も、皺くちやの温かい手も、もうどこにも存在しない。それが悲しくて、悲しくて心が張り裂けそうだった。

遠くで夏を告げるセミの声が聞こえる。

高校一年生15歳の初夏の出来事だった。

出会い

ぱちくりと瞼を瞬かせる。

高い天井に、驚くほど広い部屋。大理石だと思われる、床に敷かれたいかにも高級品だと分かる絨毯。周りに置かれている調度品もまたしかり、だ。端から端までの距離がすごく遠い長テーブルと整然と並ぶ椅子を見るに、ここはどうやら食事をする場所らしい。

しかし、水無月 明夜【みなづき めいや】の目には一つのもの——いや、一人の人物しか映っていなかった。

長テーブルの先、上座に座ってこつちを見ている酷薄なアイスブル——の瞳。

机の上にある豪華な料理から、目の前の人物が食事中だったのが伺える。歳は20代前後に見える男性。白く整った輪郭、細い鼻、薄い唇、太陽の光を思わせる眩い金髪。見る人すべてに冷たい印象を与えるだろう顔は、無表情で人形めいている。

…怖い……。

それは、動物的本能のようなものに近かった。明夜は今すぐにでもこの男性の前から、冷たい視線の前から、逃げ出したい衝動に駆られた。そんな気持ちとは裏腹に、足は固まってしまったかのように動かない。

カシャン…、と小さい音を立てて、手に持っていたナイフとフォークを皿の上に置き、ナプキンを綺麗にテーブルの上に置くと、男性は緩慢な動作で椅子から立ち上がる。仕立てのいい裾長の白い上着を慣れた仕草で綺麗に払うと、鈍い靴音を響かせながらこっちに近づいて来た。

追い詰められるような恐怖に自然と足が後退する。しかし、背中はずぐに後ろの大きな両扉に当たった。

男性はそんな明夜を変わらない無表情で眺めながら、一定の距離を残して歩みを止める。

「お前は何者だ。」

——闇を含んだような低い美声だった。

壱・始まりノ書 異世界召喚

いつも通りの平凡な朝だったと思う。

目覚まし時計の電子音で起きて、朝ごはんを食べて、学校へ行く準備をした後におばあちゃんの仏壇の前に座っていつてきます、と言った。

本当にいつも通りだった。

ただ、いつもと少し違ったのはあたしの十六歳の誕生日だった、というくらいだろう。でも、生憎あたしには誕生日を祝ってくれるような人なんて居なかった。友達はいた。けど、いわゆる上辺だけの付き合いで誕生日なんて教えてもいなかった。別に寂しいとは思わない。こんなの昔から慣れているから。

革靴を履いて、スクールバックを肩にかける。

「いつてきます。」

誰も居ないアパートの部屋に向かって言うと、ドアに手をかけて開けた。いや…、正確に言うとか開けようとした、の方が正しい。

ドアを開ける前にいきなり足元に現れた白く発光する円いモノ。その中には見たことも無い文字がぎっしりと書かれている。

「えっ…！？ちょ、何——」

光が強くなって、思わず目を閉じた。

視界が暗闇へと変わる。

遠くでおばあちゃんの声が聞こえた気がした。

そして、話は冒頭へと戻る。

何者だ、って… あんたこそ誰よ！そもそもここは一体どこなのよ！
自分が何でこんな所にいるのか、何でこの場所に立っているのか、
全く分からなくてこのおかしい現実に頭と心がついていかない。思
わず叫びだしそうになる気持ちを必死に堪える。

ついさっきまでは、確かにアパートにいたはずなのに…。

色んな不安から涙が出そうになるのを、下唇をギュツと噛んで抑えた。

誰かも知れない見ず知らずの男の前で見つとも無く泣きたくない…！

さっきまで男に対して恐怖の色を宿していた明夜の目は、今や強い意思をたたえるものへと変わっていた。気を抜けば薄れそうになる意識を叱咤して、無言で目の前の男を睨みすぎる。

男は無表情で片眉を上げたただけだった。

どのくらい時間がたっただろうか。明夜にとってそれは途轍もなく長いものに感じられた。実際は数分かもしれないし、数十分だったかもしれない。

何も感情が伺えないアイスブルーの瞳を見ると、寒くも無いのに何故か冷や汗が浮かんでくる。明夜の背中から汗が滑り落ちた、その瞬間だった。

視界に金色の髪を捉えたと同時に感じる、腹部への熱。

「あつ、……な、に……？」

何かが足を伝い落ちる感触。震える指でそつと自分のお腹を触り、それを眼前へともってくる。

赤。

それを認識した瞬間、激痛が体全体を駆け巡った。

「はっ、…ひゅっ…いた、…。」

喉からは引きつった声と乾いた荒い息しか出てこない。自分がいつの間にか、床に仰向けで倒れこんでいることにも気づかなかった。

明夜の頭の中には男に腹部を刺された。ただ、その事実だけが浮かんでいた。

「…お前は…魔女、だな。」

まじょ…？ “まじょ” ってなに…？ 意識が段々と霞んでいく明夜には、男の言った“まじょ”の意味が理解できなかった。男は端から明夜に答えなど求めていなかったらしく、淡々と暗い底冷えのする声で喋り続ける。

「魔女は追放される者。何時の時代も異端な者達は世から排除される運命。…お前は何故、俺の前に現れた。…小さき魔女よ。」

…明夜の意識はとうに途切れていた。

幕間 動き始めた運命

―事切れるのも時間の問題か。

血溜まりの中、まるで眠るようにして倒れている小娘に近づこうと
一歩踏み出した、その瞬間。

「――っ」

小娘―明夜―から目を焼くような光が炸裂し、油断した男は反射的に右腕で顔を覆った。しかし、突然のことにその影響を受けた男の眼球はすぐに機能できず、視界は真っ白だ。

男には珍しい苛立った表情を一瞬浮かべると、すぐに不思議な呪文^{スヘル}を唱えだす。この世界の者なら誰でも知っているだろう、魔法の呪文^{スヘル}だった。

一瞬で男の視界は明瞭になる。

「……取り逃がした。」

しかし、男の目的だった小娘は目の前から跡形もなく消えていた。残るのは血溜まりだけだ。男は滅多に崩さない表情に苦渋を浮かべた。

「アッシュファルベ様。」

いつ男の背後に現れたのか。董色の瞳に端正な顔立ち、腰の辺りまであるだろう黒髪をきつちりと一つに纏めている執事服の男性。ど

こか神経質に感じられる顔に、今は怒りの表情を浮かべている。

そんな男―ナハト―の顔をチラッと一瞥したアッシュファルベは、無感情に言い放つ。

「皆まで言わなくても分かっている。」

これ以上この件に触れるな、というアッシュファルベの無言の意を感じとったナハトは、眉間に皺を寄せ、幾分低い声音で告げる。

「…王が黙ってませんよ。」

忠告に分かっているという意味も込めて瞼を閉じる。

―敷地内の結界が一瞬揺らいだのを感じた。

ナハトも同様に感じとったのか、行儀悪くも舌打ちした後右手を手前にかざし、ぶつぶつと呪文^{スベル}を唱えだす。―ナハトもアッシュファルベ同様に魔法を使えるのだ。

少しの間^まの後、先ほどとは格段に機嫌が悪くなったナハトが口を開く。

「ご想像の通りですよ。…王からの召喚命令です。まったく…こういう事だけあの老いぼれは耳が早くていらっしやる。」

顔に似合わず毒を吐くナハトを視線で黙らせると、アッシュファルベはゆっくりとした足取りで窓のある方へと向かった。

――瞬強い風が吹く。

アッシュファルベはわずかに目を細めた。

「風向きが変わった。」

「……吉と出るか、凶と出るか。わたしは断然凶の方へ賭けますけどね。」

――今、静かにそしてゆっくりと運命が動き出した。

生死の境目（前書き）

主人公死亡フラグが立ちまくりです（汗

生死の境目

…寒い……。

全身に感じる冷たい何かに、明夜は瞼を微かに震わせながらゆつくりと双眸を開いていく。途端、体の中心から声にならない痛みが駆け巡る。

「あつ……。」

余りの痛さに自然と涙が溢れてくる。

…あたし、どうして……。何で……。

瞬間、蘇るアイスブルーの瞳に闇を含んだような低い声。

…そうだ。あたし、あの男に……。

今の明夜の思考ではそこまでが限界だった。

か細い息が明夜の口から度々吐き出される。それは白くなりすぐ消えた。

再びうつすらと目を見開いた明夜が見たのは真白き闇。――雪が一面に降り積もった、白銀の世界。そこには明夜の吐息以外、音をなすものはいない。

灰色の空から降り続ける白い雪。

その光景が何故か神秘的なものに感じて、明夜はうつすらと微笑む。
今にも消えてしまいそうな儚い笑みだった。

視界が端から段々と黒くなっていく。明夜はただ感じた。

…ああ、あたししんじやうんだ…。

初めて身近に感じる死の恐怖。

こわい…よ…。いたい…。だれか…たすけ…て…。

声を出したいのに喉が焼けるように熱い。でも、頭の片隅では分かっていた。

あたしなんかを助ける人なんていない。

頬に一筋の涙が伝う。

—…ここでそなたは野垂れ死ぬのか。ここがそなたの死に場所か—

真っ暗な闇の中に響いてきた、獣のような獰猛さを含んだ低い声。

—ここがそなたの死に場所か—

再び同じ事を問う。しかし、明夜は感じた。

—…置いていかれる。

それが何だか寂しくて、哀しくて…。不意に自分の状況を思い出した明夜は、残った力で暗闇を突き破るように震える右腕を天へと掲げた。

「まっ…て……。あたし…は…生きたいっ！」

パサリ…、と音を立てて腕が雪の上へと落ちた。それを最後に明夜の意識は静かに死へと向かい始める。

—そなたの意思、しかと伝わったぞ—

その声は誰にも聞かれることなく闇へと消えた。

「……ルヴァ……。おい、シルヴァ！」

「五月蠅いのお。聞こえておるわ小童。」

「……っ。潰すぞ、この老獣が……！」

「ふんっ。できるものならやってみるがよい。」

「ぶっ殺す……！」

突如襲ってきた緑光の槍を、銀髪の男は軽々と避ける。

「ちっ……。」

それに赤銅色の髪の青年が小さく舌打ちした。

「……東の魔女が現れた。北の雪山じゃ。迎えに行くぞ。」

銀髪の男の言葉に、青年は目を見開く。

「北の雪山……だと？俺が感じた場所とは全く違うじゃねえか。」

「ごちゃごちゃ言つとる暇があったらさっさと迎えに行くぞ。……急
がんと死にかかつとる。」

そう言うやいなや銀髪の男が目の前から消える。

「…！ちっ…。そういう大事なことは最初に言えっのジジイ！」

続いて青年が後を追うように消えた。

——残されたのは静寂のみ。

北の雪山——西の大国グレイシア最北端にそびえたつバラス山。その頂はいくらか離れた麓の村から見上げてもおおろおろい知れないほどの高さを誇っている。それは逆に言うと、敵国からの侵入を許さない自然の要塞とも言えた。さらに、最北端に位置するせいか、この山は一年中雪に覆われており、灰色の空が晴れたことは一度もない。

そんなバラス山の中腹に浮かぶ小さな二つの影。いわずもなが先ほどの二人だ。

「で、来てみたはいいが東の魔女が倒れている位置は分かってんのか。」

赤髪の青年は顔をしかめつつも、どこか焦りの滲む口調で銀髪の男——ジルヴァに問う。しかし、当の本人はそんな青年の声など綺麗に無視し、いきなり呪文^{スベル}を唱えだす。

「……っ、やっぱりつかぶっ殺す……！」

青年が殺気立っている隣でジルヴァは魔力を高めつつ、透視で山全体を見渡していく。その中に一点だけ何かに邪魔されるようにして透視できない場所があった。

——間違いないのお。

ジルヴァは一瞬で魔力を沈め、すぐに右手で虚空に魔法^{ルーン}文字をつづり出す。

「……ローエン。」

「ちっ……、分かってる。任せろ。」

呼ばれた赤髪の青年はスッと右手を文字の方へかざし、一気に魔力を解放させる。辺りは一瞬赤く染まるとその後人影はなく、ただ音を立てて吹雪く雪だけが残っていた。

「ジ、ルヴァ……。おいつ、ジルヴァ！」

「そちの言いたいことは分かっとなる。微かだが……、本当に微かだが息はある。ちと黙っとな。」

「……っ」

青年の痛いくらいに握り締められた拳を横目で見つっ、すぐに目の前に倒れている少女へと視線を戻した。

「大丈夫じゃ。」

青年を安心させるように、そして自分に言い聞かせるように小さくそう呟くと、さっそく治癒魔法をかけ始める。状況はジルヴァが想像していたよりも深刻だった。

――黒魔術。

魔力の気配に聡いジルヴァはすぐに気づいた。少女に――いや、東の魔女の負っている傷はただの切り傷ではないことに。攻撃魔法の中でも最強最悪と言われている黒魔術。その危険性から禁忌の魔法として扱われている。しかし――。

思案するジルヴァに苛立ちを感じながら見やる赤髪の青年。

悔しい…悔しい…！何もできない自分が。目の前にいる少女を救う力さえ無い無力な自分が。

深紅に染まった雪の上に、白いを通り越した青白い顔で死んだように倒れている少女を視界に捕らえた瞬間、心臓が止まるかと思った。まだ幼いながらも端正な顔立ちには、何の表情も浮かんではいない。それがまるで人形のように、生気が感じられない。

死ぬな…！死ぬんじゃないぞ、東の魔女…！

握り締めた拳から血が流れ出るのを感じつつ、青年はジッと目の前の少女を睨む。まるで少女を呼び戻すかのように。

「……ローエン。一気に城までとぶことは可能かのお？」

魔法をかけるのを一端止めたジルヴァは、やっと静かに口を開いた。しかし、その内容に青年は眉を寄せる。

「当たり前だ。俺を誰だと思っている。」

「そうか。ならすぐにでも戻るぞ。」

「…おい、ちょっと待てジジイ。まだ治癒が終わって…——」

疑問を口にしようとした青年の声を遮るようにしてジルヴァは言葉を発する。

「シュヴァルツ侯爵アツシュファルベ。黒魔術。ここまで言えば分かるじゃろ。」

それを聞いた瞬間、青年は思いつきり顔を歪めた。ジルヴァは口端を上げて笑うと、冷たい目で冷酷に告げる。

「…この報復は絶対せねばならん。のお、ローエン？」

「珍しく気が合うな、ジジイ。」

青年も冷たく笑い返すと移動するための魔法陣を描き始める。とにかく、この少女を早く暖かい場所へと移してやりたい、今はただその思いだけだった。

白の魔獣と赤の廃皇子（前書き）

ちよびちよび文を付け足していくので、見にくいと思いますがどうかご了承ください（汗

完璧になったらこの前書きは取り消させていただきます。

白の魔獣と赤の廃皇子

―…あつたかい……。

体の中に何かが流れ込んでくる……。

でも、何でかな……さむい……。全然冷たさが消えない。まるで栓のないお風呂みたいに流れ込んでくる何かはすぐにどこかへ流れていつてしまう……。

―…えろ……。

だれ……？ 声、がする……。高い女の子の、声……。

―…ていけ……。

どこかで聞いたような声……。いや、違う……。だって、この声は……。

―…あんたなんて消える……！

あたしの、声……？

「はっ、はあはあはあ……っ。」

苦しい…っ、息が…。

「……！おいつ、無理するな！ゆっくりでいい…焦らずに息を吸え。そうだ…ゆっくり…。」

誰…？でも、心地のいい低い声はどこかあたしを安心させる。その声に従って息をゆっくり吐き出し、そして吸う。その行為を幾度か繰り返すうちにやっと苦しくない程度には呼吸ができるようになる。

明瞭としない意識で重い瞼を微かに震わせながらゆっくりと開ける。

すると、ぼやけた視界の中に映ったのは燃えるような赤。深紅。

—…一瞬、呼吸が止まる。

すごくきれい…。

今まで見てきたどんな赤よりも明夜の目にそれは美しく映った。あのバラの花でさえもこの深紅には劣るだろう。

明夜は腕をゆつくりとそちらへ伸ばす。

「…っ！」

すると、一瞬ビクツとした振動が微かに伝わった。ついで息を呑むような気配。目の前にいる人物が明夜の唐突な行動に驚いたのかもしれない。

明夜はそこに至って初めて、自分の目に映っているこの美しい“深紅”が目の前にいる人物の髪なのだと、完全に回復した視界で思い当たったのだった。

初対面の人になんて失礼なことをしてしまったのだろう。

すぐ謝ろうと口を開いた。

「…あ……っ。」

明夜はそこで愕然とする。

声が出ない。

な、んで…？なんで声が出ないの…？

パニック状態に陥り、声を出そうと何度も必死に口を開く。だけど、喉奥から漏れるのは次第に荒くなっていくなど吐息と乾いた音だけだ。

気がつくと、明夜の視界はまたユラユラとぼやけ始めていた。

それは声が出ないという絶望からきた悲しみの涙だった。

光の宿っていない暗い瞳で、声も出さずにただ静かに涙を流し続ける目の前の少女を、俺は呆然と見つめていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3617m/>

東の小さな魔女

2011年10月7日13時12分発行